



TITLE:

鎌倉先生とゼミ生活

AUTHOR(S):

引馬, 滋

CITATION:

引馬, 滋. 鎌倉先生とゼミ生活. 経済論叢 1969, 104(3): 213-215

ISSUE DATE:

1969-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/133360>

RIGHT:

經濟論叢

第104卷 第3号

哀 辞

故鎌倉 昇教授遺影および原稿

経営戦略について	田 杉 競	1
ニュースと「企業性」の接点	島 崎 憲 一	23
フィスカル・ポリシーと完全雇用	森 岡 孝 二	41

記 事

鎌倉教授逝く

追 悼 講 演 (石川常雄・市村真一・堀江保蔵)

追 憶 談 (杉浦一平・吉田進・西村理・引馬滋)

故鎌倉昇教授略歴・著作目録

昭和44年9月

京 都 大 学 經 済 學 會

昭和44年7月18日

鎌倉先生とゼミ生活

引馬 滋

鎌倉先生があまりにも突然に亡くなられて、私達ゼミ生は本当に悲しくなりません。

今でも、先生がお亡くなりになったとはどうしても信ずることができない気持です。研究室を訪ねたら、先生が笑って迎えて下さるのではないか、そんな思いがします。大きな心の支えであった先生を失なった私達ゼミ生の深い悲しみと先生に対する心よりの感謝の気持を話させていただきます。

先生は、常に何事によらず、「来るものは拒まず」を通され、私達の相談にのって下さるやさしい人でした。ゼミでは終始にこやかに私達の報告を聞いておられるのですが、一旦私達が、「ここわからないんですけど」と言うと、先生はあのリズムカルな調子ですばやく英語を読み、要所をおさえると、私達にとって難しくてわからない個所を実にわかりやすく説明して下さいました。「要するにこうなんですよ」と、難しいことをその内容をつかんでの先生の簡略な説明は、私達にとって確かにわかりやすく、楽しく学ぶことができました。先日のゼミでも barrier to entry という語をとり出して、「最近ではこれを参入障壁とか言うけれど、僕はこれを進入に対する障壁と訳したんですよ。どうも日本の学者の間では専門用語は漢字をならべなければ、と思っているらしい。要はその内容ですよ。」とおっしゃったのを愉快に聞いたことが思い出されます。細部にこだわらず、その大局をとらえることを大事として、外国語文献をどんどん読破しないさい、とよく言われました。探偵小説を読むことをすすめられたのもその時のことです。

「来るものは拒まず」、その言葉に甘えて、もっと先生とのんびりと先生のお人柄にふれてお話をしたかったのですが、先生が紛争渦中にあるの学生部委員をやっておられたこともあって、その機会になかなかめぐまれませんでしたが、それでもゼミ討論の形で先生とお話することは多くありました。その時、先生はよくこういっておられました。「個人がみずからの意見と行動に責任をもって事にあたるのが大事なんです。多くの信条を異にする人が集まるゼミのこと、集団行動による拘束をさけ、あくまで個人の責任のもとに行動して下さい。」私達もこれにはまったくの同意見で、お互いに政治主義が高まらないことを願っていました。ですから、鎌倉ゼミがゼミ決議をしないことをめぐってさわがれた時も、顔を見合せて、「本末顛倒ですね」と笑ったものでした。学生部委員として、あらあらしい集団行動の矢面に立った先生にしてみれば、なんとにがにがしいことだったろうと思います。しかし、学生部委員として、せいっぱいその任にあたられ、「僕はどんな事にでも腹をたてないですよ。だからこの役は適任なのかも知れないですね。」とおっしゃった先生に、常々「私は研究者である」と語る先生の別な面をみた気がして、心あたたまり、尊敬の気持をいただきました。大勢に屈せず、みずからの信ずる道を歩まれ、安易な妥協を許さなかった先生は、本当に強い信念の持ち主でした。

私達のゼミに「有法子」という昨年までに4巻を数える文集があります。昨年の文集

の最初に、「私が懷古談をするのは、いささか不似合かも知れません。今年44歳ですからまだ若いつもりです。しかし、毎日学生諸君にあっていると、また特に最近では学生部委員をして、いろいろの要求や難題をふっかけてくる学生運動の代表者の諸君にあっていると、私自身、あの年令の頃にどういうことをしていたか、ふと思い合わされることがあります。……」という書き出しではじまる、先生の私の青春その(一)というのがあります。終戦の日、中国の居庸関にいた頃の激変の時期の思い出話が綴られています。その最後にこんな言葉があります。「なにかを見るということは大切なことです。それに、自分が責任をもって考えること、またそれをおこなうというのは大切なことです。目が開けるというのはそういうことでしょう。」この言葉が、そのまま先生の人生・学問に対する情熱を表わしていると思います。そして今また、私達に向ってこの言葉が語りかけられているようです。

先生の「私の青春その(一)」から先を読むことができなくなってしまったことは悲しみにたえません。しかし、私達ゼミ生は、この悲しみをのり越えて、先生より受けた学恩とやさしいお心使いに報いるためにも、力強く歩みつづける決意です。

ありがとうございました。